

かたりべ 97

豊島区立郷土資料館だより



最近の大屋神社（2009年7月撮影）
撮影場所が若干異なるためわかりにくいですが、
右写真左奥にある建物が現在も残っている。



朝の体操

学寮（大屋館）近くの大屋神社での疎開学
童たち（大屋館提供）

戦時下の学童疎開に思いをはせて

このたび、郷土資料館調査報告書第二集として「豊島の集団学
童疎開資料集（10）」を発行いたしました。今回は「日記・書簡編
IX―仰高国民学校（続）―」として、長野県小県郡神川村（現上田
市）の大屋に疎開した仰高国民学校五年生の男子と家族や友人たち
との書簡を収めました（仰高国民学校の資料は「集団学童疎開資料
集（8）」にも掲載されています）。

一九四四（昭和一九）年八月から始まった学童らの集団疎開によ
って、遠く離れ離れで暮すことになった家族は、お互いに手紙を通
して近況報告を行い、励ましあいながら、戦時下の不自由な生活を
過ごしていきました。その一コマを、次にかかげてみます。

「大屋館の前には、駅があつて、いつも、上野行の汽車や、上田
行きの汽車が、通つてゐます。上田行きの貨物列車が、来ると、「ぼ
くの、手紙が来たかと、思つてゐます」／駅の、むこうに、浅間
山が見えるはずですが、ゑぼしだけが、あるので、見えません。
秋の晴た日には、浅間山の煙が、見えるさうです。」【子より】

「いつも元気で勉強してゐるとの事で母さんとてもうれしく思
つて居ります……風呂敷はどんなのがよいですか（大か小か）

又さげかばんはどうゆうかつこうのがよいのか一寸書てしらせて
下さい。……十七日は天祖神社のお祭り日でしたがおみこしは出
しません 御神酒所だけかざつておまつり致しました」【母より】
やがて、東京は連日の空襲に見舞われるようになり、一九四五年
四月一三日の大空襲では豊島区の大部分が焼失します。一方、長野
県にも米軍機が現われるようになります。このようななかでの暮ら
しとを、本書の書簡から、ぜひ読み取ってください。

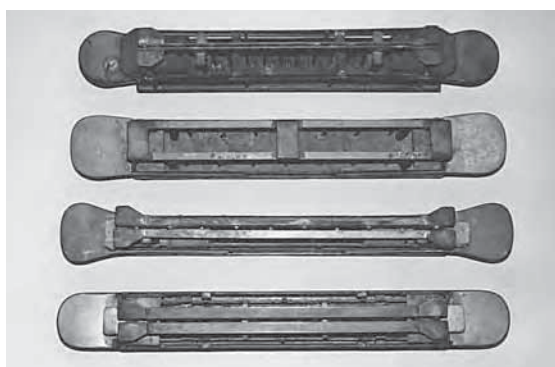
なお、一九九〇年に始まった「豊島の集団学童疎開資料集」は、
二〇年を経て今回節目の一〇冊目の刊行となりました。これからも
ご愛読していただきますよう、よろしくお願いいたします。（青木）

戦後の菓子作り

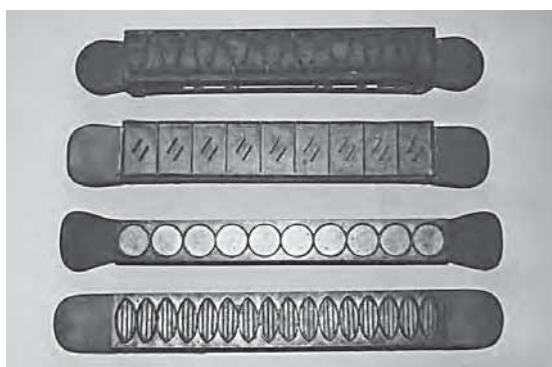
— かなめ製菓さん・要町 —

一九二二(大正一一)年生まれ的小林庸高さんは、戦後もない頃、水飴を菓子店に売ったことが縁で菓子屋になり、昭和二年、菓子作りに必要な原材料が配給されたことがきっかけで本格的に菓子の製造を始めました。最初に作った菓子は、ポン菓子でした。これはバクダンとも呼ばれ、トウモロコシと米が材料でした。次に、オコシを作りました。この材料は米が爆ぜたものです。その後、数年たつてから焼き菓子を作り、次第に菓子の種類を多くしていきました。作業は、昭和三年年まれの奥さんの恵美子さんと一緒に要町の自宅の菓子工場で行い、一九九一(平成三)年に工場を閉めるまで、カステラやパイなども作り続けました。

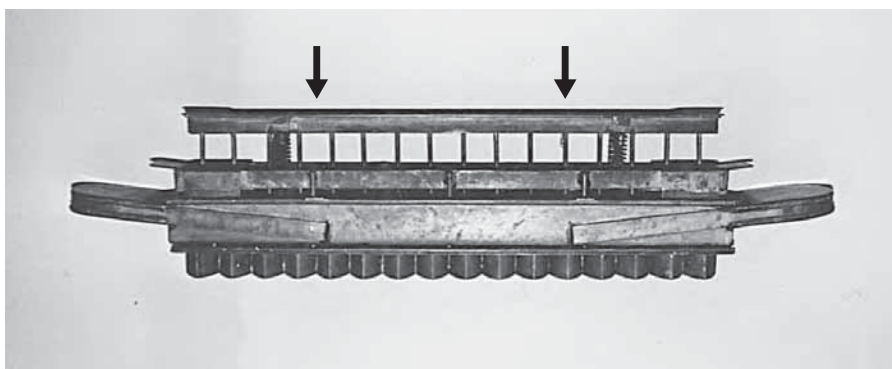
ここで紹介するものは、「クッキーの切断機」という道具です。この道具を「手抜き」と呼んでいたことからわかるように、クッキーの生地を押して付けて型を抜きます。かなめ製菓さん(それ以前には小林製菓の名称も)では、昭和五年から使っていたもので大切に保存されており、このたび当館に寄贈されました。



2. クッキーの切断機(底部) 写真1の並び順に対応している。クッキーの生地にのせて形を取り、両手で持ち上げる。



1. クッキーの切断機 菓子形の大きさは上から羽子板形(45×25)、長方形(65×40)、円形(直径35)、木の葉形(50×25)。単位はmm。1950(昭和25)年製作。真鍮製。



3. 木の葉の形の切断機 横からみたところ。最下段のところが木の葉の形の部分。1回に16枚できる。上段の方には、2か所にバネがある。矢印の方向に押して形を抜く。大きさは、左右の持ち手部分をいれた長さが525mm、高さは110mm、幅は65mm。重さは、約1800g。

写真1は、できあがるクッキーの型の方向から撮影したものです。写真2は、その反対側です。写真3は、写真1の最も下段の切断機を真横から見たとこです。同家が最も使用したものは、写真1の上段から二段目のもので、中央部分にジャムをしぼり入れました。また、その下、丸形のクッキーのものは焼いた後に

厚みができ、シソパン、クロパンとして売ったこともありました。しかし、これらの切断機の使用が三年間という短期間だったのは、手作業では間に合わないほどの生産量が必要とされたからで、その後はすべて機械化になりました。そして、良質な材料を使つたさまざまな菓子が好まれる時代の到来が告げられます。

ところで、クッキーにはさまざまな材料が使われています。かなめ製菓さんは、それぞれの材料を専門業者から仕入れました。例えば、白砂糖は千早の雑穀屋、卵は要町の卵専門業者からでした。また、バターは葛飾区の業者から、ベイクングパウダーは墨田区の業者からでした。

かなめ製菓さんが営業を始めたほぼ同時期、その近辺には同業者が複数ありました。古屋製菓さん、三笠製菓さん、南部さん、山脇さん、金崎さんと畑さん等をあげることができます。かなめ製菓さんでは、クッキーを、都内をはじめ横浜方面へ卸していました。今、この地域にかつての様子をうかがうことは難しいですが、同業者がおいしい菓子の作り方を教えあい競いあっていた地域があったことを、経験者からうかがうことができます。おそらく、道行く人に甘い香りを漂わせていたことでしょう。(福岡)

豊島とさぐる 〈19〉

豊島区の特産物（その3）

「雑司ヶ谷南瓜」とは？

■東京生まれの南瓜

現在、私たちが口にする南瓜（カボチャ）といえば、クリカボチャとよばれる西洋カボチャがほとんどですが、昭和戦前期までは日本カボチャが主流でした。

江戸（東京）生まれの代表的な品種には、①居留木橋南瓜、②内藤南瓜（資料A）がありました。①は荏原郡大崎町居木橋（品川区）を中心に栽培され、表面にこぶ状の突起があり、織物の縮緬に似

ていることから縮緬南瓜ともいわれました。②は新宿の内藤邸（現・新宿御苑）から広がり、豊多摩郡淀橋町（新宿区）、

ました。

さらに、早生種で、皮が①②のようにオレンジ色ではなく濃緑色をした③東京黒皮南瓜がありました。これは板橋付近の原産で、①と②の自然交配によってできたといわれ、千葉県富津町（富津市）に導入されて富津南瓜と呼ばれました。

（参考：『江戸・東京ゆかりの野菜と花』J A 東京中央会、一九九二年）

■豊島区域の南瓜栽培

江戸時代の南瓜栽培については不明ですが、明治五年（一八七二）には池袋村で二〇〇荷・六〇円（東京府志料）、同一

年には雑司ヶ谷村で二千個、高田村で二万個の生産があり（東京府村誌）、明治初年には南瓜がかなり栽培されていたことがわかります。明治三〇年代には北

豊島郡の南瓜の主産地として「高田村」（雑司ヶ谷村を含む）が紹介されており（北豊島郡農業志料）、郡内有数の南瓜の産地となっていたようです。

雑司ヶ谷村の旧家柳下家の「大福帳」（明治八年）や「農事日記」（明治三〇年前後）をみると、南瓜を「唐茄子」と呼んでいたことがわかります。四月初め

に苗床に種をまき、五月中旬に苗を畑に植え替え、七月下旬から収穫しています。

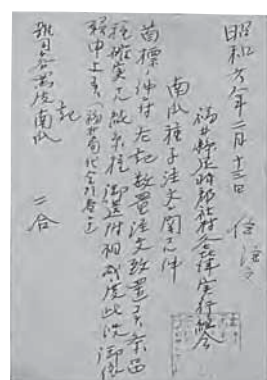
また、明治一四年の第二回内国勧業博覧会に長崎村の足立佐右衛門が内藤南瓜の種子を出品しており、高田村の鐫木家文書には内藤（菊座）南瓜の種子の注文書が多数あることから、区内では内藤南瓜が主に栽培されていたと思われます。

■雑司ヶ谷南瓜とは

資料Bは、昭和六年に福井県足羽郡社村（福井市）から高田町大字雑司ヶ谷の鐫木市太郎に宛てた「雑司ヶ谷黒皮南瓜」の「純原種」の注文はがきです。

鐫木家は、北豊島郡農産物品評会（明治三四年）に蘿蔔（大根）、落花生、南瓜種子を出品して褒状を受けるなど、篤農家として知られ、採種販売業も行なっていました。特に南瓜は評判が高く、明治

期から昭和初年まで、和歌山・岐阜・愛



B「雑司ヶ谷黒皮南瓜」の注文はがき 鐫木久一氏寄贈

知・長野・茨城・栃木・山形・新潟・石川・富山・秋田県など全国各地から「御当地名産の菊座南瓜」、「名産内藤南瓜ノ純系採種」の種子の注文が来ています。

その中で注目されるのが、「雑司ヶ谷黒皮南瓜」「雑司ヶ谷南瓜」など「雑司ヶ谷」の地名がついた品種です。これは③東京黒皮南瓜のことと思われます。『昭和八年度全国種苗商案内』には「東京黒皮南瓜は近年富津南瓜の大量生産に圧せられ勢力を失っているが、原産地の適地に於て栽培する東京黒皮は、やはり促成用種最高特徴を持っている、即ち東京黒皮は富津南瓜より約一週間は早く着熟する極早生

にして、此の特徴には富津でも敵しがたく富津南瓜の栽培地では今尚東京黒皮南瓜を原種として用ひている」とあります。

さらに石田増之助「東京市場に於ける南瓜種類の推移見聞録」「種苗世界」第一号（昭和七年）には、「（富津南瓜の）種子は毎年東京府下板橋、又長崎付近のものを買入て栽培し」とあります。

板橋・長崎に近い雑司ヶ谷地域は、昭和初期まで、内藤南瓜とともに黒皮南瓜の特産地だったのです。（横山）



A「内藤南瓜」 東京都農林総合研究センター所蔵

中野町（中野区）付近で栽培され、表面に深い縦の溝があり、菊座に似ていることから菊座南瓜とも呼ばれ

郷土資料館からのお知らせ

★『豊島の集団学童疎開資料集（10）』

発売中です

本誌一ページで紹介した資料集（左写真）を一冊七〇〇円で販売しております。また、この機会に第一〜九集についてもお目通しください。集団学童疎開に対する認識が深まるとともに、きっと新たな発見があると思います。

豊島の集団学童疎開資料集 (10)
日記・書簡編Ⅹ
——仰高国民学校（続）——
豊島区郷土資料館発行 第三十巻

★研究紀要『生活と文化』第19号発刊

本号には、研究論考五編と二〇〇八年度の年報を収録しています。

◆研究論考構成

- ・青木哲夫「一九四五年八月九・一〇日山形県神町・楯山への艦上機攻撃」
- ・秋山伸一「『池袋モンパルナス』に関する二、三の考察」
- ・小島信子「小熊秀雄の新資料『四人の人物』について」
- ・小松大介「土田松之助板金屋資料について」
- ・柳河加奈子「児童雑誌は子どもたちに何を伝えようとしたのか」

◆価格 五〇〇円（四月中旬より販売）

区民のための 博物館用語の基礎知識

Ⅱ エコミュージアム（英 ecomuseum）

フランス語の「エコミューゼ」の英訳であり、エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）をつなぎ合わせた造語である。地域全体を博物館と捉え、住民参加によって、その地域の生活そのものを研究・保存・展示・活用しようとする考えであり、その実践である。すでに各地で行われている町並みの保存・活用も、エコミュージアムのひとつの形態と言える。

▽用例△

学芸員A「『エコミュージアム』って知ってる？」
学芸員B「博物館側に都合よく、勝手に事業を展開することだね。」
学芸員A「それじゃ『エコミュージアム』でしょ！」

編集後記

「この冬は暖冬になりそう…。」という大方の予想とは裏腹に、なかなか寒い冬でした。東京都心部での二月の降雪日は、一〇日もあったとのこと。とはいっても、桜のソメイヨシノの開花日は、平年よりかなり早いとのこと。ということは、やはり暖冬？

郷土資料館収蔵資料のデータベース化事業の一環として、まもなくタッチパネルモニタ付パソコンを館内に設置いたします。本格的なデータベース稼働の前段階として、みなさんに親しみやすいメニューを考えておりますので、ご来館の折には、お気軽にメニューをピッ、ピッ、とタッチしてみてください。（秋山）

かたりべ
No.97

2010年3月25日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>